

クローズアップ 研究者



松田 裕子 (まつだゆうこ)

農林水産政策研究所 研究員
(国際領域)

専門：EU 共通農業政策の制度分析・
調査研究

三重県津市出身。2002年、東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了、博士(農学)取得。主著に『EU農政の直接支払制度：構造と機能』(農林統計協会、2004年)(2005年度農業経済学会奨励賞受賞)。農政調査委員会専門調査員、日本学術振興会特別研究員(PD)(東京大学)、日本農業研究所研究員、茨城大学農学部産学官連携研究員等を経て、2010年4月より現職。

Q 主な研究テーマを教えてください。

A 現在、主としてEUの共通農業政策(CAP)を研究しています。

幅広い施策を含むCAPの中でも、とりわけ関心を持っているのは、条件不利地域政策や農業環境などの農地手当(直接支払)と、ボトムアップ・アプローチをベースとしたLEADER事業です。これらは、制度的にも経済分析的にも、興味深い論点を提供してくれま

Q どうしてEUについて研究するようになったのですか？

A 私が初めてEUの条件不利地域政策に出会ったのは、大学3年生の夏でした。当時、日本の中山間地域対策の在り方を模索していた私にとって、EUには指定地域の農家にだけ、平地の農家との生産費格差分を補償金として支払う制度があると知ったときは衝撃でした。しかも、その制度は、なんと私が生まれた年からあったのです。

その後、修士課程1年の冬に初めて

ヨーロッパの農村を訪れたとき、長い年月とともに営農によって生み出され、いまなお維持保全され、観光客を魅了し続けている農耕景観と、その背景にある確固とした農政上の理念、そして国土観とでもいうようなものに非常に感銘を受けました。

この2つが大きなきっかけとなって、EU農政から目が離せなくなっていたのです。

Q EU研究にはどのような特色がありますか？

A 一口に「EU」と言っても、27カ国に拡大した今日では、様々な農業・農村問題を包含しています。このため、共通農業政策においても、こうしたEU内部の多様性への対応が求められています。また一方では、気候変動などの世界的な地球環境問題について、EUは一丸となって先進的な取り組みを始めています。このように、「リナシヨナリゼーション」と「欧州連合」としてのダイナミズムが混合しているのが、EUの特色と言ってもい

いかもありません。EUの農業政策は、我が国では「お手本」として扱われることも少なくありませんが、第1に、日本とEUの間にある「違い」を十分に認識すること、第2に、何でもプラスとマイナス、表と裏の両面を見ることが不可欠だと考えています。

Q これまでの現地調査で、特に印象に残っていることは何ですか？

A 海外研究の場合、そこに根付いている文化や国民性そのものが違うため、現地に行ってみないとわからないことがたくさんあります。どのような気候・立地で、どんな歴史や食文化があって、農家がどのような生活を営んでいるのか。こういったことは、パソコンの前に座っているだけでは、何も見えてきません。酪農、畜産、穀物、養蜂、有機、ワイン、フォアグラなど、いろいろな地域のいろいろなタイプの農家に数日間ずつ滞在して、農作業のお手伝いをしたり、一緒に食卓を囲んだりして、まるで家族の一員のように過ごした時間は、とても貴重な経験になりました。

Q 最後に今後の抱負を教えてください。

A 私の仕事は、農業・農村を対象とした研究である以上、地域固有の条件や歴史などを無視することはできません。現地の農家の方々の何気ない一言にも、とても重要な示唆が含まれていることがあります。大学院時代、恩師から学んだ、「cool head, warm heart」の精神でもって、地に足のついた分析ができる研究者でありたい。そう思っています。